

出題意図：

本設問は、受験者の英文読解能力を測ることを目的としている。具体的には、文章の論旨を正しく理解し、重要な概念や因果関係を把握し、読み手に伝わる文章としての的確に訳出すること、の3点が評価対象となる。

模範解答：

今日、アイデアという語は、創造性やイノベーションの文脈で組織研究者によって頻繁に取り上げられ、議論されるようになっていく。組織研究が扱うアイデアとは、通常、新しいアイデアである。すなわち、新製品のアイデアや組織変革のアイデアのように、何らかの新規性や変化の意味を含むアイデアである。この新規性の側面は、アイデアが暫定的なものであることによって含意されてはいたが、アイデアという概念が日常的に広く用いられるようになるにつれ、20世紀には初めてアイデアの支配的な特徴となった。

第二次世界大戦後の米国における経済拡大を受け、(従来の労働や資本といった要素ではなく)創造性とイノベーションが、この未曾有の経済成長を牽引する要因として扱われるようになった。これは2つの結果をもたらした。1つめは、アイデアと創造性を同義に扱うビジネス分野の一般向け書籍が急増し、歴史の大半を通じて欠いていた規範的な意味合いがアイデアという用語に付与されたことだ。例えば、アレックス・オズボーンの影響のある著作において、彼は頻繁に、「農業のアイデアは我が国の豊かな土壌をさらに豊かにしてきた」や「アイデアはより良い従業員関係を築く鍵である」といった主張をしている。著者が関心を寄せて言及しているのが、特定の種類のアイデア、すなわち価値のある創造的なアイデアであることは明白である。言い換えれば、探求(および研究)に値するアイデアとは、新しいアイデアなのである。

2つめの関連する結果は、アイデアが経済財として捉えられるようになったことだ。これは、おそらく経済学者ポール・ローマーの著作に最もよく例示されている。彼は、「アイデアを活用してアイデアを生成すること」が経済成長の重要な戦略であると主張した。同様に、リチャード・フロリダはその論争的な著書の中で、クリエイティブ・ワーカーは「生産手段を支配している。なぜなら、それは彼らの頭の中にあるからだ」と主張した。これは、アイデアについて語る際の言語の変化を示すものであった。今日では、「アイデアを生み出す」や「アイデアを創出する」といった表現が当たり前のものとして受け入れられている。

人々によって生み出される新しいアイデアとしてのアイデアの台頭は、知的財産法の発展およびそれを支える知的変化を伴った(そして、おそらくそれによって可能になった)。アイデア、情報、および技術的な原理を創造するのは(神、自然の力、あるいはミューズではなく)個人であるという観念が根づきはじめたのは、18世紀の啓蒙時代になってからである。例えば、ルネサンス期のヴェネツィアでは、新しい印刷技術や図像に対する法的保護は、その創始者に対してではなく、先着順に与えられていた。「所有的個人主義」という構成概念が発展し、著作者や発明者が頭脳労働によって新しいアイデアを創造し、その知的創

造物の所有者であると見なされるようになったのは、18 世紀の終わり頃になってからである。アイデアの価値の高まりや、個人の精神が創造性とイノベーションの源泉となったことは、1960 年代のコンセプチュアル・アートの出現など、他の領域にも見られる。この運動の著名な芸術家の 1 人は、「コンセプチュアル・アートにおいては、アイデアやコンセプトこそが作品の最も重要な側面であり、制作そのものは形だけのものに過ぎない」と主張した。